第1問

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 13 の番号を付してある。

（配点　50）

1 何かモノを見るには、視点の確保が必要だ。肉眼でも、キャメラを通してでもそうだが、何らかのモノを視覚で捉えようとすれば、安定した視点が要る。生身の人体の場合、両眼を水平に保たないと、ひどくモノは見えにくい。両眼が水平でも、いわゆる股(注1)のぞきのようなことをすれば、世界はまるっきり違った風に見える。人がモノを見るとき、両目の下にあるもの、例えば平行する二本の足は重要だ。

2 またキャメラの場合であれば、今度は三本の足、つまり三脚のようなかたちで、やはり安定した視点が確保される。それで露出時間が少々かかろうが、ブレない映像を撮ることができる。このように、何かものを見るときには、見ている視点の下に、それを可能にしてくれる何かがある。つまり見ることのためには、何か土台のようなものが前提とされる。

3 視覚にかぎらず、他の感覚による認識一般にかんしても、こうした土台のようなものがしばしば想定されている。現に、認識の土台とか、認識論的な基礎とか視座とかいうことがよく言われる。あるいは、そんな小難しい用語でなくても、じっくり腰を落ち着けて話に耳を傾けろとか、腹を据えてじっと眼を凝らしてみろとか、そういう類のことが、日常の場で口にされる。どうやら認識のためには、それを下で支える何かが必要であるが、そうした支えとなる土台は、腹や腰など、安定・固定・不動・不変のようなイメージで語られることが多いようだ。認識論的革命とかセツ(ア)ダンとかいうこともよく言われるが、それらは滅多に起こらないから革命になるのであって、普段なら認識は、つねに変わらぬ何かによって支えられていると考えられている。

4 しかし、本当にそうなのか。モノをよく見るためには、じっとしていた方がいいのか。認識のためには不動の視点が不可欠なのか。逆に、運動が認識を可能にするということはないのか。動かないと、モノはよく見えないということはないのだろうか。その場合、**A** 支えとなるのは、腹や腰ではなく、足だ。ヒトの場合、二足歩行によって相対的に高い視点が確保される。さらに、歩くこと、ないしは走ることによって、視点を高く保ったまま、自在に移動することができる。そうした移動する視点によって、以前より容易に食物を獲得し、外敵から身を守ることができるようになったのだろう。運動する認識こそが、ヒトにとって生存の有利さをもたらしたのではないか。

5 ともあれ、一九世紀の生理学的心理学は、運動する認識の理論を用意し始める。例えばそうした学は、眼球の運動に注目する。眼球は実は絶えず動き、止まることを知らない。眼球は動くことによって、盲点を回避し、視野を拡げ、奥行きを認識する。また視覚以外の感覚も、動くことによって、より容易に空間のなかで認識される。例えば、人は実際に「耳を傾ける」。耳自体を動かせる人は少ないから、それ以外の部分を動かし、つまり体を傾けたりひねったりしながら、方向を定め、聴覚を働かせる。このように、認識を支えているのは、不動のものではなく、むしろ運動する何かである――当時の心理学はこのように考えつつあった。

6 テオドール・リボー(注2)の『注意の心理学』（一八八九）は、こうした一九世紀的心理学が獲得した知見を、きわめて明快かつ簡潔に示した書物である。この書を(イ)ツラヌく基本命題はまさしく「運動なくして知覚なし」、リボーによれば、注意とは何よりも動的なメカニズムであり、筋肉の運動を伴う。注意は、たとえ静止というかたちをとる場合でも――例えば、視線を固定させるために、眼球が静止させられる場合でも――、そこには静止をもたらすための筋肉運動がある。このように知覚のかたわらには、ごく(ウ)ビショウな場合もあるが、かならず運動が存在するとリボーは考えた。

7 静止をもたらす運動とは、まさに逆説的な運動だ。不動のためには運動が必要になるということなのだから。しかし現に、**B** 安定した視点を得るためには、逆に動かなければならないということがある。例えば、対象自体が動くがゆえに、それを安定的に捉えるには、何らかの運動が必要になる場合がある。映画撮影においては、(エ)シッソウする馬や車を捉えるために、キャメラは予め作られたレールの上を(オ)ナメらかに運動しながら、撮影が行われる。対象が動くのであれば、視点もそれを追って動く。その場合、視点を支える基盤もいっしょに動かなければならない。視点は安定した基盤を保持しつつも、それでも移動しなければならない。あるいは、より正確に言えば、安定した視点の基盤を保持するためにこそ、あえて動かなけ

ればならないのだ。

8 このような認識に伴う運動は、変化を常態とし、あらゆる対象が絶えず動き続ける近代においてこそ、鮮明に意識されるようになったといえる。対象が固定しており、認識が安定した基盤に支えられていたときには、そんな基盤に眼を向ける者はいなかっただろう。しかしながら、近代という時代においては、カント(注3)をはじめとして、認識を支える基盤は何かという批判的な問いを繰り返すようになる。当初は、そうした基盤が動いているという自覚はなかったかもしれない。けれども、そうした基盤が、実際に見ている視点とはズレた別の場所にあることが、朧気(おぼろげ)ながらに感じられたのかもしれない。いずれにせよ人は、認識の基盤に眼を向けるようになった。つまり認識について、それを可能にするものを認識しようとした。

9 かくして、認識の認識、つまり見ている者をさらに見るということが始まる。眼球の裏側では、小人(ホムンクルス)(注4)が網膜像を見つめている。鏡のなかの自分の眼を覗(のぞ)き込むと、自分の眼にも自分の姿が映っているのが見える。そんな風にして、無限や分裂におののきながらも、認識を認識しようとする試みが始まる。

10 そうした試みは、一方ではカントのように、認識の形式や範疇(はんちゅう)を探るという超越論的方向に向かう。他方では、生理学的心理学のように、内在的な方向に向かう。認識に伴う運動を捉えるということは、要は認識する身体を捉えるということだ。認識とは何よりも、身体に深く根ざしている――そうした想定のもと、認識の問題が考えられ始める。

11 ヨハネス・ミューラー(注5)は『人間生理学教本』(一八三三)で、視覚を徹底して内在的に捉えている。彼によれば、視覚という感覚は、外界からの光が眼に入って生じるだけではない。それは殴打や震盪(しんとう)(注6)など、物理的な刺激によっても生じるし、薬物など化学的な刺激によっても生じる。この場合、視覚は身体の内側だけで生じる感覚であり、外界に存在する対象とは関係がない。また同じ頃、グスタフ・フェヒナー(注7)も、網膜残像の研究に取り組んでいる。残像現象において、わずかな時間ではあるが、眼の前にはもうない対象の像が異なる色で現れる。この場合も視覚は、外界の対象とは切り離される。

12 かつてであれば、そうした感覚の示すのはたんなる幻影で、認識などと到底呼べるものではないとみなされただろう。人間の身体はむしろ、認識を妨げたり歪(ゆが)めたりするものと考えられていた。その場合、認識とは究極的には真理の認識であり、神

による認識だという前提があった。しかし一九世紀の心理学は、その前提をくつがえす。そこで人間の身体は、認識を妨げるものではなく、認識を生み出すものとして現れる。認識を受け取るものではなく、認識をつくり出すものとして現れる。運動とともに、そして身体とともに、認識は受動的なものから能動的なものへと転化する。

13 認識とはもはや、鏡に世界が写されることではない。認識とは、何らかの媒体(メディア)を通じて、世界を写し取り、つくり出すことである。生理学的心理学の時代は、写真機や幻灯機(注8)、さらには映画に至るまで、さまざまな視覚的メディアの発達した時代でもある。こうした**C**メディアが、視覚を生み出し、認識をもたらす。そしてその基盤には、人間の身体がある。細切れの映像を次々に写し出せば、人間の眼が網膜残像をつくり出すことで、連続した運動の認識が生まれる。それが映画である。映画という媒体と身体が接続されて、認識が生まれる。というよりも、身体がすでに一種の媒体(メディア)であり、認識を生み出す装置なのだ。

(北垣徹(きたがきとおる)「運動する認識」による)

(注)
1 股のぞき――立った状態で足を開いて上半身を深く折り曲げ、両足の間から風景などを眺めること。
2 テオドュール・リボー――フランスの心理学者(一八三九～一九一六)。
3 カント――イマヌエル・カント。ドイツの哲学者(一七二四～一八〇四)。
4 小人(ホムンクルス)――人間の体内にいて、感覚や認識などをつかさどる役割を果たすと考えられた存在。
5 ヨハネス・ミューラー――ドイツの生理学者(一八〇一～一八五八)。
6 震盪――外側から振動を与えること、振り動かすこと。
7 グスタフ・フェヒナー――ドイツの物理学者(一八〇一～一八八七)。
8 幻灯機――ガラス板に彩色して描いた画像やフィルムに写された像を拡大して、壁やスクリーンに映し出す装置。

問1　傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5 。

(ア)　セツダン　1
① サイダンに花を供える
② カンダンなく雨が降る
③ パーティーでカンダンする
④ ダイダンエンを迎える
⑤ カンダンの差が大きくなる

(イ)　ツラヌく　2
① 注意をカンキする
② ハダカイッカンから再出発する
③ 集中することがカンジンである
④ まことにイカンに思う
⑤ ジャッカンの変更を行う

(ウ)　ビショウ　3
① ビカンをそこねる看板
② 品評会でハクビと言われた器
③ シュビよく進んだ交渉
④ 人情のキビをとらえた文章
⑤ ケイビが厳重な空港

(エ)　シッソウ　4
① 繊細な細工が施されたシッキ
② 卒業論文のシッピツ
③ 豊かな才能に対するシット
④ 重い症状を伴うシッカン
⑤ 親の厳しいシッセキ

(オ)　ナメらか　5
① イッカツして処理する
② 国が事業をカンカツする
③ 登山者のカツラクを防ぐ
④ 領土をカツジョウする
⑤ 自由をカツボウする

問2　傍線部A「支えとなるのは、腹や腰ではなく、足だ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 人間がモノを認識するには、視点を安定させ、固定するイメージのある腹や腰ではなく、視点の安定と移動をともに可能にする足の働きが重要だということ。
② 器官の運動によって認識が可能になるためには、腹や腰などの視点を確保できるが高く保てない土台ではなく、キャメラの三脚のように視点を高く保つ足の機能が必須だということ。
③ 器官の運動によって認識が可能になるためには、腹や腰を土台の比喩として認識するだけではなく、足を移動可能な視点の比喩とみなすことが必要だということ。
④ 人間がモノを認識するには、腹や腰に象徴される心理の不動性を見つめるのではなく、足によって象徴される身体の可動性に注目することが大切だということ。
⑤ 人間がモノを認識するには、水平方向へ安定して支える腹や腰だけでは十分ではなく、垂直方向へ視点を移動させる足の役割が不可欠だということ。

問3　傍線部B「安定した視点を得るためには、逆に動かなければならない」とあるが、本文中とは別の具体例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 冬の静かな街並みの様子を歩行者のまなざしで捉えるために、撮影場所を一箇所に定めて撮影するのではなく、カメラを構えて街を歩きながら撮影する。

② 卵からかえった鳥のヒナが巣立つまでの様子をあらゆる角度から撮影するために、巣の周囲に複数のカメラを設置するのではなく、遠隔操作によってレンズの向きを変えながら撮影する。

③ 街頭でいつ発生するかわからない暴動の決定的瞬間を撮影するために、街の高所に複数の監視カメラを設置するのではなく、カメラを片手に群衆の中を歩きまわりながら無作為に撮影する。

④ スカイダイビング中の人を撮影するために、超望遠レンズを装着したカメラで地上から撮影するのではなく、カメラマン自身も被写体と並んで空中をダイビングしながら撮影する。

⑤ ボールを追って走る犬の躍動感を捉えるために、ズーム機能を備えたカメラによって遠くから静止画像を撮影するのではなく、超高速撮影が可能なカメラで動画を撮影する。

問4　傍線部C「メディアが、視覚を生み出し、認識をもたらす」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 写真機や幻灯機や映画などの視覚的メディアが、人間の視覚能力に優越する形で世界像を作り出し、その新しい世界像を通じて視覚的メディアに従属する意識が生まれ、人間に対するメディアの優位性を人々が承認するようになるということ。

② 写真機や幻灯機や映画などの視覚的メディアが、人間の視覚能力を超えた精緻な画像を作り出し、その新しい画像を通じて人間が自己の視覚能力に疑問を持つようになり、人々が一九世紀以前の自己像の改変が必要だと認めるようになるということ。

③ 写真機や幻灯機や映画などの視覚的メディアが、人間の身体を平面上に映し出し、それを見た人々の新しい感覚を通じて肉体が客観的な対象として把握されるようになり、人々が身体と精神との二元的な関係を重視するようになるということ。

④ 写真機や幻灯機や映画などの視覚的メディアが、身体を縮小化して映し出すようになり、その新しい身体像を通じて人間の意識と身体とのバランスが崩れるようになり、人々が心身の均衡が保たれることの重要性を考えるようになるということ。

⑤ 写真機や幻灯機や映画などの視覚的メディアが、人間の身体機能や残像現象と結びつくことで、それまでになかった新たな映像を作り出し、その新しい映像を通じて人々がそれ以前とは異なる世界像を見いだしていくようになるということ。

問5　第10段落～第13段落に示されている、「認識」と「身体」の関係についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① かつては、人間が何かを認識しようとするときには、身体の感覚の中でも特に視覚が重要であると考えられていたが、一九世紀の心理学の発展を通じてその考え方は退けられ、身体を構成するすべての感覚器官が認識の基盤になっていることが証明された。

② かつては、人間が何かを認識しようとするときには、身体の諸機能が大きく影響することはないと考えられていたが、一九世紀の心理学の発展を通じてその考え方は批判され、その諸機能をむしろ利用して認識を成立させる方法が模索されるようになった。

③ かつては、人間が何かを認識しようとするときには、身体のあらゆる感覚器官が深く関わっていると考えられていたが、一九世紀の心理学の発展を通じてその考え方は改められ、視覚を中心に認識が形成されることが重要であると結論づけられた。

④ かつては、人間が何かを認識しようとするときには、刺激に反応する身体が必要不可欠であると考えられていたが、一九世紀の心理学の発展を通じてその考え方は見直され、身体が認識作用を困難なものにしてしまう側面にも注目が集まるようになった。

⑤ かつては、人間が何かを認識しようとするときには、身体によってその認識が阻害されてしまうことになると考えられていたが、一九世紀の心理学の発展を通じてその考え方は否定され、身体こそが認識を可能にしていると理解されるようになった。

問6　この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 10 ・ 11 。

① 第1段落における「モノ」というカタカナ表記は、「物」や「もの」という一般的な表記よりも、それが視覚の対象であることを明確にしている。

② 第3段落の第4文の「どうやら～多いようだ。」という表現は、単に推量を表すだけではなく、この文の内容に対する否定的な評価を含んでいる。

③ 第4段落の第1文から第3文の文末の「～のか」という表現の連続は、反語として、各文の内容と反対の考えであることを強く印象付けている。

④ 第6段落の第3文「注意は、～筋肉運動がある。」の中のダッシュ（――）は、それらにはさまれた表現が、その直前の内容に対する条件を示す但し書きに相当することを示している。

⑤ 第7段落の第3文「しかし現に、～ことがある。」冒頭の「しかし」は、第1文・第2文に示された「逆説」に対して、さらにその逆説となる内容が以下に続くことを予告している。

⑥ 第8段落には、「そんな基盤」（第2文）「そうした基盤」（第4文・第5文）という前の内容を指す表現が繰り返されるが、どれもほぼ同一の内容を指している。

⑦ 第9段落の第2文「眼球の裏側では～見つめている。」という表現は、当時の人々の理解を示しているとともに、この段落の最終文の「認識を認識しようとする」という抽象的な内容を形象化している。

⑧ 第12段落の第5文と第6文は、「～ではなく、～現れる。」という対比的な表現形式を反復することによって、その内容の重要性を強調している。